

学習形態 新型ウイルス非常事態のためネット上で講義。自学。

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

第二部

『化身土巻』に学ぶ（6）

仙台の方々、集中豪雨の中集まってくださったんでしょうか。ありがとうございます。私の気持ちばかりが先走っていたようで、皆さん 19 願の所に集中されております。未熟な講義ですみません。

余計な話で紙面を割いてしまいますが、本願（48 願）の配列について、「この 1 から 48 までの順番がきちんと意味をなしているんだ」と言われた先生もいらっしゃいました。（それについて私の若いころのエピソードがあるんですがまた集まれたら雑談でお話ししたいと思います）それでここは、18 願が 19・20 願を生み出す、と言われます。

それは 18 願ですむところを、19・20 願を生み出さなければならない問題が 18 願にある、という事です。

そういう意味を踏まえて『化身土巻』があるという事になります。そうしますと『総序』の「調達闡世をして逆害を」と「世雄の悲、逆謗闡提を」というところから始まりますが、それは 18 願が抱えた「唯除」の課題に他なりません。

ですから、私は 19 願の課題は 18 願の五逆・誹謗正法（＝逆謗・闡提）が『観経』に具現化されている、という事を念頭に入れて学んでいかなければならないと考えています。その『観経』の内容を 19 願に当てはめたのは、言うまでもなく親鸞聖人の「化身土」であります。（唯除には闡提はありませんが）

すなわち、18 願が 19・20 願を生み出したように、私達の「教・行・信・証」の有り方が『化身土』を生み出したと言って過言ではないと思います。本来、「浄土真宗を案ずるに二種の回向あり。・・・」と言われるように、「教・行・信・証」で十分なんです。十分のはずだったんです。実際、法然上人の「選択本願念仏」で十分のはずだったわけです。

若き親鸞はその領きを「雑行を棄てて本願に帰す」と決意表明されております。しかしその後の親鸞聖人においてそうではなかったわけでしょう。この『観経』の課題（提婆・アジャセ・韋提希等の出来事）と親鸞聖人の人生とが重なり合って、それだけでは治まらない大きな問題が重くのしかかってきたのではないかと、私は感じております。

ここまで言ったんで白状しますと、私はこの「化身土」には一つの思惑を持っています。それはただの思い付きではなく、親鸞聖人の人生に見出したことでもあるんです。それを少し述べたいと思います。

課題 4 5 榊法存の「化身土」への思惑

まず、点を拾い上げ、その点と点を結んでいくと、一つの結論が導き出されると思っています。

p326 - 12. 「修諸功德」— 行としての「修」という事。

p328 - 12. 「常に仏を見たてまつらず、経法を聞かず、菩薩・声聞・聖衆を見ず」— 仏法僧

p331 - 8 「異の方便、欣慕浄土の善根」— 善根

p339 - 3 「三経の方便は諸善根を修するを要とす」— 善根

p343 - 15. 「三宝を見たてまつらず」— 仏法僧

p344 - 6 「植諸徳本」「善本・徳本」— 行としての「植」、一行でありながら二種がある

p345 - 15. 「四依弘経」— 釈迦の遺言

p351 - 15. 「如来の興世、値い難く見たてまつり難し・・・」 — 三宝に値う事の「難」、それを信じることの「難」

p352 - 7~14. 「信不具足の文」 — 三宝に値う事は得者を信じること。

P353 - 16 「第一真実の善知識は、いわゆる菩薩・諸仏なり」 — 仏に値う事は善知識に遇う事。

p356 - 8 「己が善根とする」 — 善根を植える事の意味の過ち

p358 - 6 「見仏の善根を植えざる人」 — なぜ善根を植えるのか。

〈結論〉ここで「仏は、無仏世の我らを重罪とする」と述べられています。この事の意味は「仏はましませども、我らに見えていない」という事を示しています。という事はもう一つ踏み込んで、「仏法も一切の書物などの中に仏法があるのだ」と。また「全人類の中に(たとえ法衣をつけていなくても)比丘僧がいらっしゃるのだ」という事を言いたかったのではないだろうか、と思うのです。ただ、見えないのは私たちの見抜く善根がないから見えないのだ、ということをしめしていると思うのです。その善根の流れが、19願 20願を経て、見仏の善根に至る歩みを示しているのではないでしょう。

親鸞聖人の人生において法然上人(善知識=仏)と出会い、念仏(浄土真宗=法)をとおして、いし・かわら・つぶての如くの人々(われらなるひとびと=僧)といきてこられて、親鸞聖人は念仏弾圧や流罪、越後の生活などの、三宝に巡り合った実体験を基礎にしてこの教学を構築されたのではないかと、私には思えてくるのであります。

まあ、皆さんはどう思われるかは、ご自由ですので、こだわらずに、自分の思考で読んでいただきたいと思います。

さて、前回は、中々まとまらない講義になってしまったようなので、もう一度まとめてみますと、それらの課題の題材は、19願の「修諸功德」という事と20願の「植諸徳本」という二つであります。そしてその出発には「もろもろの善根を修するを要とする」p339という事があるわけです。しかし「善根を修する」と言っても、19願と20願の二つはどう違うのかと言えば、「修」と「植」の違いですね。その中身の「功德」と「善本・徳本」の違いは、あるにはあるんでしょうけど、今はおいておきますが、むしろこの「修」と「植」のイメージの方が気になるわけです。「修」は修行的なイメージ。これは「継続」を意味します。そして「植」は軽い行動・行為的なイメージです。つまり一つのことを「育てる」という感覚です。それが聖道門と浄土門の相違を言い表しているように感じます。

そうすると、その二つを分けていくというより、この19願と20願の関係性、『観経』と『小経』との関係性が一つの注目点になってくると思います。私たちは、三願転入という言葉が頭にしみこんでいるために、どうしても三願を一緒に考えようと、私達はしてきたように感じています。むしろ19願と20願の二願を見ていく必要があるのではないのでしょうか。

「修」と「植」の関係。座談会で「教我思惟」と「教我正受」を取り上げておられましたが(4)、これも「思惟」は継続ですし「正受」は領きですから、「修」の継続と「植」の育てる、育ったというイメージにつながっていきます。この辺にも19願と20願の関係が見えてくるのではないかと思います。

もう一度、全体を見渡しますと、P357の「特にこれを頂戴するなり」と「信に知りぬ」以降の二段に分けてみると、見えてくるものがあります。仮に(仮説)この後半は前半の補足の文、つまり前半の内容の註釈文であると見ることができないのではないかと、思うのです。

そういたしますと、ここのご自釈(4行目)には「聖道の諸教」と(6行目)「浄土真宗」が述べられています。この分判は19願『観経』と20願『小経』に充当するのではないのでしょうか。何も「聖道の諸教」は「浄土真宗」と別だ、ということではなく、「聖道の諸教」の中に浄土思想もはいつているわけですね。

天台教学などそうです。ですから『観経』などは聖道門の『観経』として見る事ができるわけです。

前に帰ってみますと、この「化身土」の始まりはP326「しかるに・・・半満・権実の法門に入る・・・」ところから始まります。邪道から仏門に入る、というところから始まるわけです。この時の「半満・権実」は仏教全体、つまり「聖道の諸教」「浄土の真宗」のすべてと見ていいだろうと思います。そこのところにおいて真実はなく虚偽の身である衆生を救わんがため19願が立てられるわけですね。これが「臨終現前」の願になるわけですが、化身土に生まれても「胎生」ですから、500年の間三宝に会わないわけです。つまり誰にも会う事がないわけですね。

この辺も座談会で指摘されていました①。これは大事なところでもあります。「19願は邪定聚という限り邪は邪でも定聚ではないか」という疑問も出てくるのではないのでしょうか。ですから集まりは集まりなんです。それを九品とか三輩という集まりがあるわけです。でもその集まりは「邪」である、というわけです。ですから「誰にも会えない（胎生）」という事はどういう事か、という事なんだろうという問題提起でしょう。

これを私流に言えば、「大衆の中の孤独」という事じゃないかと思います。本当の出会いというのは三宝に出会うことに尽きるのではないのでしょうか。

それから、「辺地懈慢界」と「疑城胎宮」のちがいが②、ですね。「懈慢」については『十地経』の「七地沈空の難」の事と同義でしょう。十地までであるのに七地においてすべて覚ってしまうわけです。いわばもうやることがないという事です。これを超えるためには如来が出現し、如来の加勸によって八地に行けるわけですね。この事を「臨終現前」の内容に重ねていると考えられます。つまり仏道そのものの問題性であります。

それに対して「城・宮」はある意味で「安心」を意味します。安楽世界です。前者はやる事がなくなっても「まだ先がある」という事は自覚できるわけです。ただそのためにはどうすればいいか解らないだけです。後者の方は安心、安楽の世界なんです。ですから、それが真実の浄土だと思ってしまうわけです。座談会でも話題にされていますが(2)、「疑城胎宮」の「疑」とは何か、という事ですね。疑があれば安心はできないわけです。でもそこで安心しきっているわけです。だから自分では「疑」はないわけです。

それでは、その「疑」とはなにか、と言えは「仏智の疑惑」なんです。自分では「仏智を疑っている」などとは夢にも思っていないわけですね。その仏智疑惑は「罪福心」つまり「罪福を信じる心をもって本願力を願求する」形として現れわれて来るのでしょうか。この「罪福心」というものも、私達はもっと吟味していく必要があります。

でも『化身土』では仏から言えば「仏智疑惑」、衆生から見れば「難信」と言われているわけです。「難信」に気付けばいいんですけど、気付かないで安心していることが「疑」と言われる所以なのでしょう。そしてまた、それでは、19願は無駄かと言えは、それを『観経』を通してみると、その『観経』に「顕彰隠密」があるんだと、p339「観経には方便・真実の教を顕彰」しているんだ、というわけです。ここで、「方便・真実」と逆になっています。それは何かと言えは「方便」は『観経』、「真実」は『小経』を指しているわけです。だから『小経』についても「顕彰」がある、として示されてくるわけです。

そして「彰」において『観経』では「深心」、『小経』では「一心」。これは「利他真実の心」(p340-8)と言われるわけです。そしてこの心によって「勝行」を起こされるわけですが、それが「門八万四千に余れり」と述べられます。

ここから「門余」の問題が提唱されていきます。この門余は前回も触れましたが、これはこの『化身土巻』においての超えなければならぬハードルの一つだと考えております。

「八万四千の法門」といういわば仏教全体と「それに余る」という本願海の位置づけをどう考えるか、という問題です。「余る」という事が、「八万四千の法門」以外としてみるのか、また「八万四千の法門」を含めてそこから溢れ出た余分なものも合わせて本願海というのか、それともまた別の見方があるのか、という問題であります。この「八万四千の法門」とは、いわば「聖道門」と「浄土門」の両方を含んだ仏教全体を指し示すわけです。それを「超える」という意味になってくるのか、ですね。この問題は、ただここだけの

問題ではなく、実は三願転入の論理と重なってくる問題だと考えています。これに関しては、それぞれのご意見を頂戴したいと思います。

それでは今回の課題に入りたいと思います。

課題46 「果遂の誓い」の「果遂」は何を意味しているのか。

それでは、『小経』の一心という事に入っていきたいと思います。p344からです。ここから読んでいきますと、先ず気になるのは「行に二種あり（善本・徳本）」という言葉です。私たちは『小経』の行は念仏という“一行”と思ってまいりました。

そういたしますと、念仏という一行の中（私たちの意識の中）に善本と徳本の二種があるという事でしょうか。そういたしますと、p346-10の所からこの「善本・徳本」について丁寧に述べられ、そして「阿弥陀如来は、もと果遂の誓いを発して・・・」と結ばれています。という事は、「果遂の願」の根拠としてこの善本・徳本があることを物語っているように思えてなりません。

そして、この御自釈を読み進めていきますと、「顕彰」の分別が出てきます。これは先ほど申しましたようにp344-11『観経』に依るがゆえに『小経』にも「顕彰」があるといわれています。そういう意味においても『観経』の存在は重要であることになりすし、同時に「仮令の誓願、良に由あるかな」という意味も領けるのであります。

それで「顕」は「一切諸行の少善を嫌貶して、善本・徳本の真門を開示」と述べられています。「一切諸行」とは『観経』の諸行の事でしょう。それは「少善」であって「多善根」ではないと、嫌ってそしているわけです。そして「自利の一心を励まして、難思の往生を勧む」と述べられています。この時の「善本」「徳本」は、単に「多」を意味しているわけです。これが「彰」になるとその意味が大きく変わってきます。

「彰」は「真実難信の法」を彰わすわけです。「難信」は先にも触れましたが、それは我々の「疑惑」ですね。我々の疑惑が「難信」という形で明らかになってくるという事です。そしてp345-6「直ちに弥陀の弘誓重なるによって、凡夫念ずれば即ち生まれしむることを致す」と述べられてきます。この弥陀の弘誓が重なるという事は、いったいどういう意味であろうか。皆さん方、どう考えられますか。この事を明らかにしない限りこの20願（果遂の誓い）はわからないと思います。

これについて、もともと原本ではp350-14には「仏来迎したもう。直ちに弥陀の弘誓重なるをもって、凡夫念ずれば即ち生まれしむることを致す」と述べられているわけですね。これは仏の来迎によって弘誓が重なるというわけですから、『観経』の「第七華座観」の所ですね。ここを見ても、私にはどうしても弘誓が重なるという部分を見つけることができません。皆さん方は、この原本の『法事讃』をどう読まれますか？

ところが親鸞聖人はp345で「重なる」根拠を「難信」「甚難」のところに言い出されておられるわけです。しかもそれは、「彰」、隠された意味であるという事を言われるわけです。そしてそこから「隠彰の義」を開いていくのだ、と示されているわけです。

そしてその後『小経』の意味付けをしていくわけです。で、『小経』はご存じのように「無問自説の経」ですね。この「無問」というところに大きな意味を見出しておられるわけです。つまり「問う事ができない」という事でしょう。それはなぜかと言えば「甚難」だからです。誰も問う事ができないという事をもって「甚難」を彰わしているんでしょ。問うのは比丘たち、すなわち我々衆生の事です。衆生である我々が問う事が出来ないんです。だから「恒沙の諸仏が証護している」本当の意味を述べているんだ、という事ですね。ここも確かめておかなければならないところでもあります。「正意」という言葉が気になるでしょ。

そしてそれに続いて「四依弘経」の大士や宗師は真宗念仏を開いて「濁世の邪偽を導く」と言われるわけです。この時の「四依」とはなにか、「濁世の邪偽」とは、誰の事であろうか。

その答えは置いておきまして先に進みますと、p346-10「濁世の道俗」と出てまいります。そして先に進

みますと、釈迦は「十方濁世を勸化す」と言い、阿弥陀は「本、果遂の誓いを発して」「諸有の群生海を悲引す」と述べられてまいります。

ここで「本、果遂の誓いを発して」というところに注目してみましょう。そういたしますと、この20願は18願から生まれてきたはずですが、この20願は「本」から発されていたという事になります。この事を想像いたしますと、18願と20願が本からあったという事になります。

私はここに「弘誓重なれる」ことのしるしがあると見ています。そして18願の「唯除」と20願の「果遂」が重なるのだらうという事です。この二つは「救済から除かれた者」と「それを救い遂げる」という内容が連動するわけですね。連動して初めて「救い難い身（五逆・謗法）」が救われていくわけです。そして、その証明として、善本と徳本が示されているのではないのでしょうか。というのは、p347に「善本とは如来の嘉名なり・・・徳本とは如来の徳号なり」とありますね。これは名と号ですね。私たちは簡単に名号というけれども「名」と「号」二つ合わせて「名号」になっているんですね。それでこの二つは何かと言えば、ご存じでしょうけれども因と果、因名と果号なんですね。つまり「行」としての念仏が因果として完成しているという事を意味するわけです。

これを18願から見れば、20願と重なって初めて18願が完成されるというわけです。しかしこれで「チョン チョン」と終わらせるわけにはいきません。まだ「四依」とは何か、「濁世の邪偽」とは誰か、という問題が残っています。

それと、「それだったら、五逆・謗法を除くとは言わず、最初から救えばいいではないか。」「何故、唯除したのか」という問題があり、それは『信巻』に課せられてくる課題なわけです。

それからもう一つ、「難思往生」の難思と「難思議往生」の難思議の語句の意味がもう一つ理解できておりません。まあこれは『真仏土巻』で取り上げなければならない問題でもありますから、そこでまた取り上げるつもりです。

今回はここまでしておきましょう。今回は宿題がいっぱいできてしまいました。ご意見・ご質問待っています。